

# ブラームス: 交響曲第1番

H. S.

2017.05.07-

# 目次

はじめに	3
第1章 作曲に関する経緯	4
1.1 背景	4
1.2 作曲過程	4
1.3 初演	4
1.4 出版	4
第2章 作品の構造	5
2.1 概観	5
2.2 第1楽章	5
2.3 第2楽章	5
2.4 第3楽章: <i>Un poco Allegretto e grazioso</i>	5
2.5 第4楽章	7
第3章 演奏と録音	8
3.1 初演から出版まで	8
3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容	8
3.3 ヨーロッパおよびアメリカ	8
3.4 日本における演奏史	8
3.5 録音	8
参考文献	9

はじめに

## 第1章

# 作曲に関する経緯

1.1 背景

1.2 作曲過程

1.3 初演

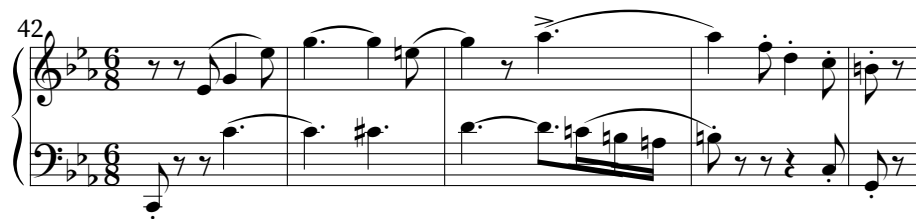
1.4 出版

## 第2章

# 作品の構造

### 2.1 概観

### 2.2 第1楽章



譜例 1: 第1楽章第42小節から

### 2.3 第2楽章

### 2.4 第3楽章: Un poco Allegretto e grazioso

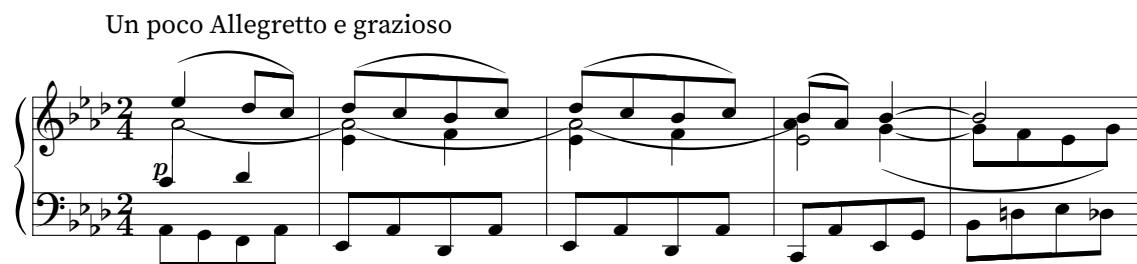
ブラームスはこの大規模な交響曲の中で、164小節という小振りな「間奏曲」を用意した。ベートーヴェン風のスケルツォではなく、より古風なメヌエットのような音楽をここに置いたことは、ベートーヴェンの交響曲(例えば第5番)から意識的に距離を置いていることの現れであろう。しかも、この楽章は全体を通して二拍子で書かれており、純然たるメヌエットでさえない。この楽章は完全にブラームス風の音楽であり、この事実ひとつ取ってもブラームスの第1番が「ベートーヴェンの第10番」という評価では言い尽くせないことがよく表れている。

主部 (A)	中間部 (B)	再現部 (A')	コーダ
1-70	71-114	115-153	154-164
As-Dur, 2/4	H-Dur, 6/8	As-Dur, 2/4	As-Dur, 2/4 (6/8)

表1 第3楽章の構成

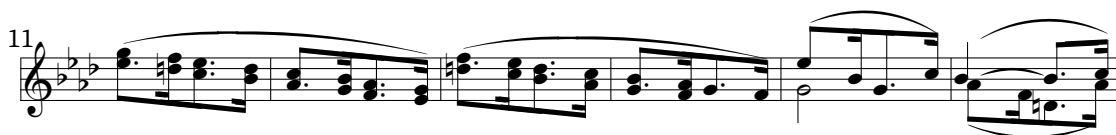
構成は比較的単純な三部形式 (A-B-A') だが、後で見るように再現部 A' は主部 A の単調な繰り返しとなることが避

けられており、三部形式の短い楽章にしては変化に富んだ印象を与える。



譜例 2: 第3楽章冒頭

第3楽章冒頭はまずチェロのピッチカートに乗ってクラリネットが優雅な旋律を提示する(譜例2)。ブームスらしく5小節を単位とする変則的な構造を取る。しかも、2拍子が5小節続くのではなく、2+2+3+3という変拍子である。続いて第11小節からフルートとファゴットが加わって下降音型を中心とする第2句を奏でる(譜例3)。こちらは冒頭のクラリネット(第1句)と異なり4+4小節の標準的な形である。第1句と第2句がこの楽章の基本主題を構成する。



譜例 3: 第3楽章第11小節から

第19小節から、やや拡大された形で両旋律が確保される。ここで依然として第1句は9小節単位という変則的な形を、第2句は4小節単位の標準的な形を保っていることは注目に値する。また、拡大部分である第29小節から第31小節にかけて、Vn2にこの曲の基本動機xがさりげなく登場している(譜例4) ことにも注意したい。



譜例 4: 第3楽章第29小節2拍目からの Vn2

第45小節でヘ短調に落ち込むと、クラリネット、次いでフルートとオーボエに新しいリズムが出る(譜例5)が、これは前半は第2句、後半は第1句に基づく経過句である。



譜例 5: 第3楽章第45小節2拍目から

第62小節で変イ長調に戻ると第1句を再現するが、これはあっさりと流して遠隔調であるロ長調の中間部へと続く。ここで第65小節からの木管楽器の動きが第4楽章の第58小節や第295小節を思い出させる、と言うと穿ちすぎだろうか。その解釈に立ってこの箇所を第3楽章第28小節からの木管および譜例4に関する上の記述と比較すると、主部Aにおいて3回演奏されるこの主要主題は、最初(第1小節から)は含みのない形で提示されるが、2回目(第19小節から)は第1楽章に、3回目(第62小節から)は第4楽章に寄せている、ということになる。中間部Bが第1楽章

の追憶に捧げられ、再現部 A' が第4楽章の準備段階となっていることを踏まえると、この見方は如何にもありそうに思える。



譜例 6: 第3楽章第71小節から

中間部は八分の六拍子での Dis 音の連打から始まる (譜例 6)。これは直前の第 65 小節から第 70 小節にかけて何度も強調される B 音から誘導されたものであるが、第 83 小節でホルンとトランペットが強い調子で Fis 音を連打するに至って、これが第1楽章のオルゲルクンプトの回想であることが明らかになる (第1楽章展開部の金管楽器の用法を思い出そう)。ただ、第73小節からの順次進行は節回しや3度を好む傾向という点ではむしろ第2楽章の主要主題を思わせる。

続くトリオ風の音楽 (第 87 小節から) は不安定な和音進行が特徴的である。それまでは口調まわりで安定していたが、ここで基本動機 x がバス声部に潜ることによって多彩な和声が導き出される。

## 2.5 第4楽章

## 第3章

# 演奏と録音

3.1 初演から出版まで

3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容

3.3 ヨーロッパおよびアメリカ

3.4 日本における演奏史

3.5 録音



## 参考文献

- [1] ウォルター・フリッシュ (訳：天崎 浩二) 「ブラームス 4 つの交響曲」 音楽之友社 (1999)
- [2] 三宅 幸夫 「ブラームス」 新潮文庫 (1986)
- [3] 池辺 晋一郎 「ブラームスの音符たち」 音楽之友社 (2005)
- [4] 西原 稔 「作曲家 人と作品シリーズ ブラームス」 音楽之友社 (2006)
- [5] 「作曲家別名曲解説ライブラリー ブラームス」 音楽之友社 (1993)
- [6] 「ブラームス回想録集」 全三巻, 音楽之友社 (2004)
- [7] スコア 音楽之友社版 (2003) 解説：三宅 幸夫
- [8] スコア G. Henle Verlag 版 (1997) 解説：Robert Pascall
- [9] ベルホルト・リッツマン編 (編訳：原田 光子) 「クララ・シューマン ヨハネス・ブラームス 友情の書簡」 みすず書房 (2012)